

能力評価に関する基本的な考え方の論点整理

日本語教育小委員会において能力評価について、総論として取り上げるべきであるとされた意見と、論点となった事項（これまでに出示された意見、留意事項、検討事項）に加え、ワーキンググループ案（たたき台）を示す。

1. 総論で取り上げるべきとされた意見

- ・ 評価については多種多様な考え方があるが、能力評価に関する報告書の最初の部分で、「評価に関する総論（評価についてどういった考え方があるのか、その上で、日本語教育小委員会では評価についてどう報告書を取りまとめたのか）」を記す。
- ・ 社会統合を大前提とするのではなく、日本社会で生活する上で日本語でのコミュニケーションが期待される部分があるということから、能力評価の位置付けを示す。
- ・ 能力評価は飽くまでも学習者が日本語教育の目的・目標を達成するために日本語教育プログラムの一環として行うことを示す。
- ・ 能力評価について取りまとめを行う際、能力評価と日本語指導者の指導力評価は不可分の部分があるということ踏まえ、能力評価に続き、指導力評価についても検討を行うことを明記する必要がある。「生活者としての外国人」に対する日本語教育の内容・方法について検討全体の中で「能力評価」に関する検討がどこに位置付けられているのかということ明記する。

2. 論点

**論点① 「生活者としての外国人」にどういった評価が求められるか。
（何を評価の目的とするか、だれのための評価とすべきか、どう活用されることを期待するか）**

- ⇒ 大前提として、学習者のための評価とすべきであり、総括的評価、診断的評価ではなく、形成的評価とするのがよいとの意見が多かった。また、「学習者のための評価」の内容について、以下のような意見の広がりが見られた
- (1) 学習者が自身の日本語学習状況を把握し、学習を継続するための評価
- ・ 学習者が自分の日本語能力を把握できるようにすること、その際、学習者が結果を納得して受け止められるようなものにすることが必要。
 - ・ 学習者が自分の日本語学習を振り返ることができるようにすることが必要。
 - ・ 学習者の現在の能力の把握だけでなく、日本語学習の次のステップが学習

者に見えるようなものとするべき。

- 能力評価が本人の日本語学習のモチベーションにつながるものであるべき
- 「日本語学習を続けたい・周りとのコミュニケーションをしたい」と思えるようになったかなど、コミュニケーションに対する積極性やモチベーションにつながるものとすることが大事。
- 日本語を使わなければならない、ある一定の基準を越えなければならないということではなく、日本語を学習したい人にとっての動機付け、学習奨励となるようなものがよい。
- 授業の直後に授業で取り扱った内容が「できる／できない」を評価するだけでなく、長期に渡って生活を豊かにしていくことにつながる評価とすべき。
- 日本語を学習することでどういうチャンスが広がるかを示すのがよい。
(※個人によってなりたいたい姿が違うということの扱いについては要検討。)
- 社会との結びつき・社会参加のきっかけとなる評価（教材例に対してだけではなく、一般的な社会生活の中での評価も取り入れる）とすべき。
- 評価結果は学習者の意思を反映する形で活用されるべき。（※評価結果の活用の仕方の倫理規定を設けた方がよいという意見と、そこまで縛ることはできないのではないかという意見あり）。
- 日本で社会生活を送ろうとしている人たちで、かつコミュニケーション上の必要から日本語を必要と感じている人たちに対し、学習を奨励する目的で「目安としての評価」が必要である。それは単一のスケール状のもの、単一の方法、手段によるものではなく、様々な側面を持つものである。
- 支援者等に対し、評価には学習奨励や学習動機に関わる自己評価的なものと社会統合に結び付くような評価とがあり、多層的であることを伝えることが大事ではないか。

⇒「学習者のための評価」とすることを大前提とした上で、併せて以下のような評価の視点もあるのではないかという意見が出された。

（２）支援者等が学習者をより適切に支援するための評価

- 指導者が学習者の状況を把握し、適当な日本語教育プログラムを組み立てる際の参考とする。
- 指導者が実践したプログラムが適切だったかどうかを振り返る。
- 学習者の日本語能力を家族や支援者が把握していれば、日本語学習のモチベーションが下がったときに周りが励ますことができるのではないか。

（３）学習者の社会参加を支えるための評価

- 日本語教育の専門家だけでなく、一般にも分かりやすい評価とすることで進学や就労の際に活用することが考えられる。学習者がこういった状況に達しているかということが分からないと、周りは進学や就労の機会を提供できないのではないか。

- ・ ポートフォリオに地域住民が評価する部分を組み込むことで、外国人と地域住民との交流を促す効果がある。
- ・ 評価について成果物を出すことで、「生活者としての外国人」に関わる人たちが「生活者としての外国人の日本語」について考えてもらうことが大事である。評価に関する成果物が流通するようになったときに、価値基準も同時に流通することになるということを意識しておく必要がある。

※ 留意事項

- ・ 評価結果がどのように利用される可能性があるか、広く考えておくことが必要である。
- ・ 「学習者のための評価」ということを前提とするならば、学習者をふるいに掛けるような評価（やそのような活用方法等）は避ける方がよい。
- ・ 評価の内容や方法論よりも先に、評価の観点（特にだれにとっての評価なのか）ということを検討し、固めておく必要がある。

<検討事項>

- ・ 「学習者が自身の日本語学習状況を把握し、日本語学習を継続させていくための評価」を中心に検討するということがよいか。また、それと「支援者等が学習者をより適切に支援するための評価」、「学習者の社会参加を支えるための評価」をあわせ、全体的に扱うということの問題はないか。あるいはどの部分に重点を置くべきか。その場合、相互に組み合わせられるもの（組み合わせられないもの）はあるか。
- ・ 他に押さえておくべきことはあるか。



<ワーキンググループ案（たたき台）>

- ・ 日本語教育小委員会では標準的なカリキュラム案等で、地域の実情に合わせた日本語教育プログラムを設定し、実施することをそのねらいとしていることから、「学習者が自身の日本語学習状況を把握し、日本語学習を継続させていくための評価」とする。（日本語能力の審査・証明を行うにはそれぞれの地域において日本語教育の体制整備が進められていることが前提となる。また、能力評価だけでなく、学習機会の保障も求められる。）また、学習者の日本語学習を支援するため「支援者が学習者をより適切に支援するための評価」についても視野に入れたものとする。
- ・ 「学習者が自身の日本語学習状況を把握し、日本語学習を継続させていくための評価」とするために、学習の目標や記録、日本語能力の記述を行うポートフォリオの形を取る。記録については、支援者等がこれまでの毎回の学習の記録や教室の記録を確認できるポートフォリオ（資料7参照）を作成する。

論点② 評価者について（だれが評価をするか）

⇒ だれが評価するかということについては、（１）自己評価、（２）他者評価、（３）それらの組合せ、という意見が見られた。

（１）自己評価

- ・ 日本語学習を管理するのは学習者自身であるということを考えると、自己評価が大事である。
- ・ 自分ができたと思う評価を他者と共有できるようにすることが大事。

（２）他者評価

- ・ 支援者による他者評価（学習者の日本語能力の把握を行う）がある。
- ・ 近隣住民がチェックリスト（ベンチマーク、can-do-statements）を基に学習者の評価を行い、それをさらに専門家が見るという二段構えの形は考えられないか。その際、一般の人にも理解できるような透明性が求められる。

（３）自己評価と他者評価の組合せ

- ・ 自己評価と他者評価のすり合わせを行うことが大事である。
- ・ 自己評価は大切だが、その一方で外国人の日本語学習の支援者による評価も必要。学習者が評価について周りと考えたり、評価の結果がずれている場合に、お互いの評価結果についてコミュニケーションをしたり、交渉したりすることが重要である。学習者、支援者ともに評価について考えるツールとすることが大事である。

<検討事項>

- ・ 自己評価、他者評価、それらの組合せ等について、どういった方向性で考えるべきか。
- ・ ほかに押さえておくべきことはあるか。



<ワーキンググループ案（たたき台）>

- ・ 学習等の記録、自己評価、他者評価を組み合わせる。
- ・ 評価は学習プログラムの一環として行うことを前提とするため、他者評価は日本語教室の指導者が行うことを想定（広く一般の人が評価を行うツールとしては作成しない）。
- ・ 学習者や学習支援者が日本語能力を把握するほか、日本語教育プログラムの改善のための材料としても活用できるようにする。

論点③ 評価の観点について（何を評価するか）

⇒ 標準的なカリキュラム案や生活上の行為を踏まえた評価について検討すべきであるとの意見のほか、教材例で取り扱う内容について評価をするのがよいという意見や、日本語学習や日本語使用の記録を取るのがよいという意見があった。

（１）標準的なカリキュラム案の内容・生活上の行為

- ・ 「生活者としての外国人」に対する日本語教育について検討をしてくれているので、生活者として行動できるかどうかということを見るべきではないか。
- ・ 「生活上の行為」ができていないかどうかということで見ると一番簡単である。また、周りの住民等に対しても学習者がしっかりと生活できているかどうか（＝生活上の行為ができるかどうか）を気にしてもらえるようになるのではないか。
- ・ オランダのポートフォリオ評価では、細かいことを見ずに「できる／できない」を見ている。また評価することだけでなく、それをきっかけに周りとの交流や外国人に対する理解が生まれると考えている。
- ・ カリキュラム案に掲載されている「生活上の行為」のみを対象とするか。

（２）教材例で取り扱う内容

- ・ カリキュラム案，ガイドブック，教材例というこれまでの小委員会の成果物の流れに沿ったものとなる。
- ・ 教材例に固執すると教材例で取り上げている内容をどれだけ覚えたかといった形での達成度評価になってしまう危惧があり、「生活者としての外国人」に求められている評価とずれる可能性が高い。

（３）日本語学習，日本語使用の実態

- ・ 何か「できる／できない」ということではなく、「日本語について何を学習したのか」「日本語を使ってどうコミュニケーションしたのか」という記録を取ることが大事であり、ポートフォリオ等を活用することが考えられるのではないか。
- ・ 学習履歴や学習期間等が見えるものにすることがよいのではないか。
- ・ 社会統合を前提として個人の学習履歴や言語に関するバックグラウンドを記載するのは議論の前提が違ってくる。あくまで日本語学習の支援という観点から必要な情報を記載できるようにするのがよい。

（４）その他

- ・ コミュニケーション能力（標準的なカリキュラム案）の範囲を超えて、社会統合のための評価や市民テストとして位置付けることはできないのではな

いか（これまでに行ってきた議論と前提が異なってしまう）。

- 学習の接続や社会とどう接続していくかというところに焦点を当てた評価とするべき。学習者の背景は否定しないが、日本語ができるようになることで、日本語を使って①健康かつ安全な生活を送ることができるようになる、②自立した生活を送ることができるようになる、③相互理解を図り、社会の一員として生活を送ることができるようになる、④文化的な生活を送ることができるようになるということを示すのがよいのではないか。
- 学校は目的が明確であるが、地域は多様である。目的とあっていない評価軸は使うことができない（余り意味がない）のではないか。
- 手帳等の具体物の形とポートフォリオ的な情報の塊は区別して議論すべき。
- 移動があっても学習の継続、持続が可能になるようなツールとすることが大事。

※ 留意事項

- 論点①の整理の仕方によっては、その他のものが挙がる可能性もある。

<検討事項>

- 評価の目的、活用の仕方や「生活者としての外国人」の状況と照らし合わせて考えた際に、何を評価することが適切か。
- 他の可能性はあるか。



<ワーキンググループ案（たたき台）>

- 上記、「(3) 日本語学習、日本語使用の実態」と「(1) 標準的なカリキュラム案の内容・生活上の行為の達成度」を取り上げる。
- 達成度は飽くまでも「日本語を使って生活上の行為をどの程度できるようになるか」ということであり、「日本語に関する知識や情報」の理解度や情報量ではない。

論点④ 評価の枠について（どういった基準で評価するか）

⇒ 評価基準については以下の意見が見られた。

（１）生活上の行為に関する基準を作成する

- ・ 生活上の行為ができるかどうかということを説明する文（キャンドゥーステートメント：can-do-statements）を作成する。ただし、どのようなキャンドゥーステートメントを作成するかという点については以下の五つの意見があった。

① 「〇〇ができる／できない」を見る

⇒ カリキュラム案で取り上げている生活上の行為の事例を目標として用いる場合、現状の生活上の行為の事例・能力記述のままでよいかどうか検討が必要。

※ カリキュラム案で取り上げている生活上の行為の事例及び能力記述のレベルが、対象としている学習者の日本語のレベルと照らし合わせて妥当かどうか、検討が必要。

② どの程度複雑なことができるのか、あるいはどの程度流暢にできるのかなど段階性を持たせる

⇒ カリキュラム案で取り上げている生活上の行為の事例を目標として用いる場合、現状の生活上の行為の事例・能力記述について段階的な目標設定を行うことが必要。また、どういった観点から段階的な目標設定を行うかということについても検討が必要。

③ 単に行為ができる（買い物ができる）だけでなく、「日本語を用いて人間関係が構築できるようになった」など、目的、成果等を含める

④ 動機や意欲などの心理面の変化も含めたものとする（例：〇〇をしようと思うようになった、〇〇が大事だと分かった）

⑤ 社会参加を含める（※現段階では具体例なし）

- ・ その一方で、「地震に対応する」などは本当に行動できるかどうかということとはどのように測定するのかという意見があった。

（２）意欲、態度での変化

- ・ 「生活者としての外国人」にとって大事なことは学習しようと思うこと、モチベーションを持続させることであるため、コミュニケーションや学習に対する気持ちの面を評価するべきであり、主観的な評価で構わない。
- ・ 学習に対する気持ちや態度が大事であって、実際に行動できるかどうかと

いうことは評価しなくてもよいのではないか。

- ・ 学習者の学習意欲・動機を支えるツールとなるか。
- ・ 学習者にとってよりよい学習環境を作るためのツールとなるか。

(3) 日本語によるコミュニケーションの状況

- ・ ポートフォリオ、自分の日本語使用状況を振り返ったりするものが必要。

(4) 複数の評価基準の選択・組合せ

- ・ 人がコミュニケーションにおいて何を評価するかということは異なる。また学習者もコミュニケーションの何が上達したいのかということも異なる（コミュニケーションのスキル、交流を深めること、効率的に目的を達成することのうち、どれを重視するかということも異なる）。学習者ができるようになりたいことが違うので、評価も異なるのではないか。一つの基準では評価できないのではないか。
- ・ 学習者がこのように評価してほしいということを実行できるように、複数の評価項目、評価軸を組み合わせることが可能な評価システムを作成すべきではないか。
- ・ 評価の枠組例を作成すべきであり、それは地域によって変えられるものとするべき。
- ・ 日本語教育の現場で使ってもらえるようなものがよいのではないか。

※留意事項

- ・ カリキュラム案は地域の実情に応じて工夫・修正することとしており、きっちりとした基準を作ると、これまでの検討経過と矛盾するのではないか。
- ・ 「生活者としての外国人」であるということを考えると日本語能力を単純に数値化して示すのは適当ではないのではないか。また、結果を数値化して示したとしても、その数値の意味が周りに理解されない可能性がある。
- ・ 数値化し、単純に「できる／できない」で値踏みするような評価はふさわしくない。
- ・ 「できる／できない」ではなく、どうすればできるようになるか等のコメントを入れたものとするべき。
- ・ 「生活者としての外国人」は個人によってニーズが異なり、できるようになりたいと思う内容、こんな風になりたいと思う姿が異なる。そのため、単一のスケールにマークする方法は向かない。（それぞれのニーズがどのように違い、どういった能力が必要なのかという個別性を描き出していくような評価が必要ではないか。）
- ・ 能力とはそもそも幅があるものである。タスク等の状況によってパフォーマンスは変わってくることを考えると、評価の基準もそういった幅を考慮したものにすることが必要ではないか。

<検討事項>

- ・ どういった評価枠を設けることが適当か。
- ・ 他に押さえておくべきことはあるか。



<ワーキンググループ案（たたき台）>

- ・ ポートフォリオには日本語教室（頻度や扱った内容）の概要のほか、能力記述を基に、どういったことを学習したのかということ記録する学習活動の記録を記載する。
※ 能力記述の細分化の詳細については資料5を参照。
- ・ また、ポートフォリオには教室活動で取り扱った能力記述を基に、教室活動で取り上げた内容がどの程度できるようになったかということを確認するためのタスク（ロールプレイ等）とその結果を記載する欄を設ける。
- ・ ロールプレイ等の方法により、日本語能力を測定し、評価する際の基準について、「○○ができる」「○○がおおむねできる」「(周りの助けなどがあれば)できる」など大まかな形で示す。
- ・ 日本語を用いて生活上の行為ができるようになることで、人間関係の構築や日本語学習に関する動機や意欲の変化、社会参加ができるようになることを目的とする。また、学習者とも評価の目的について共有することが大事である。

論点⑤ 評価の手続き、方法について

⇒ 評価の手続き・方法について、以下のような意見があった。

- ・ 「いつ評価を行うか」ということについて検討が必要である。日本語教育実施前、実施期間中、実施後のどの段階で行うかということにより、能力評価の持つ意味合いが変わる（形成的評価か、診断的评价か等）
- ・ 「どのようにして能力の把握を行うか」ということについて検討が必要である（手段、方法等）。
- ・ 「客観的」ということに関し、数字で示せば客観的であるというわけではない。評価結果に至るまでの過程を示し、「だれでも確認できる」ようにすることが大事である。
- ・ だれでも確認できるように評価の手順は決めておく必要があるだろう。ただし、その手順通りにやったところで同じ結果が出るとは限らない。
- ・ 自己評価や他者評価を行うかどうかは学習者自身の判断に基づくものである（任意であるべき）。

<検討事項>

- ・ 他に押さえておくべきことはあるか。



<ワーキンググループ案（たたき台）>

- ・ 日々の学習の記録については、能力記述のリストを基にその都度、ポートフォリオに記述する。
- ・ 日本語能力については、タスクリスト（例としてロールプレイ等）を作成。タスクを基に能力評価を行う欄をポートフォリオに設ける。
（※ 評価を行う時期については、引き続き検討を行う。）